

URP GCOE Working Paper Series

No.3 March, 2009

天水圍:

「虧」どうしてこの一文字で表現することができますか？

Tin Shui Wai New Town:
Is it a Matter of Inadequate Provision?

鄧永成(香港浸会大学准教授、URP香港サブセンター・ディレクター)

Wing Shing TANG, Associate Professor, HongKong Baptist University

(翻訳) 中岡深雪(大阪市立大学都市研究プラザ・特別研究員)

(Translator) Miyuki NAKAOKA, Research Fellow, URP, Osaka City University

大阪市立大学 都市研究プラザ

558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

Urban Research Plaza, Osaka City University

3-3-138 Sugimoto Sumiyoshi Osaka, 558-8585 JAPAN

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp>

天水圍：「虧」 どうしてこの一文字で表現することができようか？*

鄧 永成

香港バプティスト大学地理学部

大阪市立大学都市研究プラザ 香港サブセンター ディレクター

(翻訳 中岡深雪 大阪市立大学都市研究プラザ 特別研究員)

概要

本論文は歴史地理の観点より着手しており、繭から糸をつむぐように天水圍開発の疑念を解き明かす。そして「計画の失敗」という論調の貧困さを論証する。そのため特定の時間、空間において発生した土地開発体制の中で、天水圍で土地投機として行われた不動産プロジェクトを分析する。不動産市場が低迷した際、この体制を崩壊に導く可能性を減らそうとイギリス香港政府は公金を惜しげもなく投入し、状況を挽回するため天水圍に新都心を作るとを計画した。新都心ではまず個人の住宅家屋が建設され、後に公共住宅地域が建設された。ここから天水圍は交換価値の生じる空間を強調し、使用価値を持った（使用することに価値のある）空間を軽視していることがわかる。公共住宅の住民は就業機会を得ること、公共施設の使用、外部への交通のいずれもが不便であるという意味で、絶対空間と相対空間が欠如しており、設備が比較的揃っている個人住宅の住民もまた地域の元からの住民と連携が取れず、かつての市街地（もしくは大陸）での生活と継続性がない。こうして普遍的に発生するような強烈な無力感や手立てのなさにより数々の悲劇が引き起こされた。これら一連の問題に対する世論を「計画の失敗」として簡潔化することは結局はこれらの問題を政治問題としてしか扱っていないことになる。現況を改善するには天水圍開発問題を「計画の失敗」という本来政治的なトピックスでなかったものを再び政治問題として扱い、土地開発体制の局面に立ち返って探求する必要がある。

Tin Shui Wai New Town: Is it a Matter of Inadequate Provision?

Wing Shing Tang

Department of Geography, Hong Kong Baptist University

(Translator, Miyuki Nakaoka)

Tin Shui Wai new town in Hong Kong is a classical example of social exclusion in a modern city. Once labelled 'the city of sorrow' by the local media, the new town is characterised as exhibiting all the stigmatised traits that one usually identifies with social exclusion. Informed by a spatial container concept, one can easily, but erroneously, attribute these traits to inferior planning. The latter results in an inadequate provision of transport (and therefore a mis-match between the jobs

* 香港研究資助委員会 (HKBU2137/04H) と香港バプテスト大学研究委員会 (FRG/06-07/ -81) に研究費の一部を提供していただいたこと、および王潔萍氏に資料収集において尽力いただいたことに感謝します。胡天新氏には先に完成した三稿に潤色を加えていただき、ここに感謝いたします。これは香港バプティスト大学地理学科 Occasional Paper No. 82, 2008年7月、に基づいている。

なお、タイトル「虧(き)」とは、損をする、不足する、欠けるという意味である (訳者注)。

and the unemployed) and social facilities and services (and therefore the prevalence of juvenile delinquency, unhappy marriage, poverty, immigrant families, welfare dependency, etc.). This account is far from accurate, as it has de-politicised politics, and once achieved, de-politicised planning. To improve, this paper has adopted a historico-geographical perspective to analyse the formulation and implementation of the new town. In particular, it argues that it is impossible to comprehend the origin of this new town without elaborating the emergence of a land (re)development regime since the end of the 1960s. Accordingly, the new town project was a last-ditch effort by the government to rescue the property market, which burst in the late 1970s, also at the time during Sino-British negotiation over the colony. Then, the previous new town development model was applied to a milieu within a private-developer dominated, unequal power relation and at a time when Hong Kong was undergoing industrial restructuring. With the aid of Lefebvre's triad concept of space and Harveys' space as a keyword, this paper deciphers the dilemma in which Tin Shui Wai public housing residents contingently, and unluckily, put themselves (anxiety, helpless, fear, etc.). Having historico-geographically explained the development of Tin Shui Wai within the land (re)development regime, the paper has re-politicised the social exclusion issue, thereby reclaiming, in a small step, justice for the people living there.

1. 「非情都市」の「計画の失敗」：論調の貧困さ

ここ数年、香港社会ではおしなべて社会問題に注目が集まっている。悲惨な事件が再び発生するにつれ、天水圍新都心は2007年にまた各界の注目を浴びるようになった。2001年に出た「非情都市」（自殺、うつ病、不倫などが頻繁に起こっている地域）との記述（壹週刊、2001）、2004年には「倫常事件」が勃発し、再び「病んだ地域」という見方がなされるようになった。そして貧困、家庭内暴力、資源の欠如、生活保護、新移民問題などが取り沙汰されるようになった。社会福祉の専門家は次々に献策し、政府は「地域の健康」または「地域の資源」を天水圍問題の核心として扱いたがる（文匯報、2007）。愛国心を持った学者や専門家は「12の子女」（陳惜姿、2006）や「18名の青少年」（キリスト教香港信義会天水圍青少年総合サービスセンター、香港大学社会科学学院、2007）など個別の事例より天水圍が決して非情ではなく、よい子女が居て、よい青少年も居る、自分を向上させることは怠っていないことをアピールする。しかし昨年（2007年）、再度惨事が発生し「非情都市」の言論が再び世論を席卷するようになった。これまでと違って「天水圍家庭検討グループ」の報告にあった25項目の改善措置さえも遂行にはほど遠く、世論より焦点が当てられた社会福祉学界は、その矛先を都市計画に向けるようになった。天水圍の問題は「計画の失敗」にある（あるいは邵家臻（2008）が彼の新書の中で論じた「虧・画」（計画の欠如））。それは公共施設の供給不足や資源の再分配の不均衡による貧困の集中などを招いた。社会から

挑まれた挑戦に対して、香港政府は政治を鼓舞するため、また「民意」に順応するのが好きなため、問題を計画の失敗にあるとした。社会福利署專線發展局の林鄭月娥局長によると天水圍で起こった問題が「十大建設」プロジェクトの中の新發展区（洪水橋、古洞北、粉嶺北、打鼓嶺）で再び発生するかどうかを聞かれた時、矢も盾もたまず、ほとんどの新發展区は規模が比較的小さく、かつ「平衡」と「弾力性」を持った計画であり、また環境保全と緑化を重視しているので、計画の中にある問題も解決できるだろうと答えた。言い換えれば、天水圍の問題は「計画の失敗」であり、深いところに問題があるわけではなく、「計画の失敗」は技術的な問題に起源しているにすぎないのだ。（劳工及福利局の張建宋と社会福利署署長の余志穩も、天水圍のその他の技術的な解決策を提示している。当該地区が住民と「心からの対話」をし、「彼らの声」に耳を傾けること、精神科の専門医を増やすこと、職員の指導と警官の巡回を増やすことなど、こういった人民統治に関するテクニックは紙数の限界より他所に譲る。）

天水圍の問題は果たしてこのようであるのか？

天水圍開発の疑念は歴史地理の観点より繭から糸をつむぐように分析してやっと理解できる。かつて拙著では（鄧永成等、2007）フーコー（Foucault）の統治性（governmentality）を運用した一連の観点を提起したが（Tang、1997）、植民地政府が60年代後半に「内憂（社会不安）外患（香港の今後についての中央間の話し合い）」に直面した際、新都心の空間を利用して、「プライド」を持った「新人類」を作り出したことには実績がある。以下はその点を補うものとして植民地政府と資本（その際たるものは土地資本であるが）の絡まりあった関係を説明する。70年代初頭に香港では不動産を主軸とした体制が作り上げられ、時間が経過するにつれ、更にそれが強化され、技術をもってごまかし、政治を後押ししてきた。天水圍に新たに都心をつくり出し、最終的にはこれまでやってきたのと同様に新都心の空間モデルを運用したことで、天水圍の悲劇が生み出されてしまった²。

ここで見られるように、天水圍の計画と実践は市中の想像と比べて更に政治的である。道理をよく理解するため本文では空間性の議論を提起した。空間性（spatiality）がキーワードとなって（Massey、2003）、空間の生産と実践、そして権力関係の分析ができる。現在、地理学界での共通の認識として空間性は空間的想像に対して固有を超越し（boundedness）、一個の簡潔直裁な実体（material object）に限られないなら、人とそれがおかれる環境も含め互動関係、社会関係および地理も考慮に入れなければならない。ハーヴェイ（Harvey、2006：119-148）が近年提起したものからも空間について論述できる。空間は一個の自然によって与えられた絶対空間（absolute space）（唯一無二の存在と確固たる周辺がある）とは限らず、

¹ フーコー（Foucault）の統治性（governmentality）理論を用いることでこれらの新しい発展を解釈できる。Lemke（2002）を参照。中国語での紹介はフーコーと強世功（2003：166-86）がある。

² もし関心があるのであれば、読者はこれから挙げる文献で資本や階級の分析を知ることができる。

またそれは物と物の間（遠くは天空の果て、近くはすぐ隣）かもしれない。もしくは異質の（異なった社会文化要素と関係する「いまどきの異なった」）相対空間（relative space）である。言い換えれば、空間を理解するには独立した地理的境界線あるいは客観的な物質環境を超越すべきである。また空間は一個の相関空間（relational space）で一方では歴史、経済、社会などの過程と絡まりあい、もう一方では個人の経験や想像と織り交ざっている。更に重要なのは権力が実践の過程の中で空間を改造し、空間は更に権力を執行する重要な手段および担体となる。それぞれの権力モデルが存在する空間の条件が異なるように、権力モデルにおよぶそれぞれの空間尺度（立地、体積、距離、方向、移動、流動、連携、限界、境界と領土を含む）は各々異なる（権威を除いて支配、利益で人を誘う、操縦、強制、うそ³、説得、談判等）（Allen,2003）。簡単に言うと「空間は権力であり、権力は空間である」。天水圍の空間は資本の操縦、計画の強制、政府の支配および利益で人を誘うなどの権力である。最後にハーヴェイが彼の空間に関する叙述とルフェーブル（Lefebvre）の空間の実践（spatial practices）—空間の表象（representations of space）—表象空間（spaces of representation）の三元空間（spatial triad）⁴（Merrifield,2006:108-112 参照）を織り交ぜたことで、空間と個人の体験、想像についての論争関係を詳細に描写でき、新都心計画の空間表象がいかに天水圍の住民の空間的实践を変化させ、新しい空間を形成することができたかが正確に把握できるようになった。不必要な「非情」空間の物語（spatial stories）を「作り出す」こととなった（鄧永成等、2008）。これらは決して単一の単純で技術的な「虧」の一字で理解しきれものではない。

2. 天水圍の歴史地理：論調の貧困さ

すべては70年代初頭からの土地開発体制（land (re)development regime（Tang,2008 参照）から語るができるだろう

植民地制度が始まり、特に1855年に香港政府が財政を自らまかなわなければならなくなると以降、土地は香港発展における重要な地位を占めるようになった。1841年に最初に販売を始めたときに（政府からの有償譲渡というべきだが）、土地に関連する収入はすでに相当なものになっていた。単に1881年を例にとってみても、不動産収入はすでに当時の香港財政の3分の1あまりを占めていた（馮邦彦、2001:25）。1960年代に入って、62年が不動産

³ ルフェーブル(1998、2005)によると真実か嘘か（truth and lying）は技術的言語を用いて権力を合理化（rationalise）することを指す。この例として、西鉄と香港ディズニーランドの基本建設プロジェクトは投資建設を行うには動員できる人数は少なかったのだが、あたかも非常に多く、尽きないかのよう多めに推計をし、投資の決定を合理的としたことが挙げられる。

⁴ 空間表象が及ぶ空間は一種の科学家、計画技師等の専門家が従事する抽象的な空間である。表象空間は相関した意向と符号を通じて直接使用される空間となる。つまり居住と使用の空間である：それと物質空間が重なり、後者の物体に対して象徴的に使用される。空間実践は空間の流動、人々の日常的な生産と再生産活動に及ぶ。

のピークであるが、その比率は16.6%であった。その後、比率は不動産市場の興亡によって上下する：75年には5.3%と比較的割合は低かった。80年代には徐々に上昇し、35.2%とピークを迎えた。その後2年で割合は若干低下したが、全体的には依然として高かった。言い換えれば、我々が注目している天水圍事件に関連する年には香港政府にとって土地収入は至極需要で、更にその安定性は軽視できないものであった。

その他の商品のように、土地市場（きわめて特別な商品であるが）にも周期性があり上下変動する。1960年代中ごろから80年代初めまで、香港の不動産市場は2回の循環周期を経験し、1回目の上昇は68年から73年ごろであった。73年から74年には低迷期に入り、2回目に急速に発展したのは75年から81年の間である。その後市場は調整低迷期に入り、84年末には再び復活し、89年までに至る。不動産市場の波は香港政府にとっては油断できないものであった。更に政府を悩ませたのは68年以降不動産市場と株式市場が強く連動するようになり、不動産市場の問題がさらに複雑化し、益々処理しがたくなったことである。それ以前は株式市場はイギリス資本によって独占されており、多くの中国資本はただ指をくわえて見ているだけであった。しかし、遠東、金銀、九龍などの三箇所の公益所が相次いでオープンし、中国資本の企業が株式市場で正式に上場するようになった。これらの企業は資本を集める機会を得たことで不動産市場へ進出することができ、比較的实力のある企業は土地の購入および入札、競売以外にも「土地はあるけどお金はない」上場会社と合併し、こういった会社の所有する土地を開発した。株式市場で得た収入で購入したのは不動産だけではなく、その他の領域にも進出し、次第に不動産を中心とした資本の集中、および集約を行い、香港経済全体を左右するまでになった。こういった動向は不動産上場企業の資産の市場価値を高め、株価を上昇させた。さらに内外多くの資金を株式市場に呼び込み、不動産市場と株式市場の相乗的な上昇局面を作り出した。この状況も市民の広大な投資意欲をかきたて、市民は続々と資金を投資し、自覚してかせずか、不動産発展の渦に巻き込まれていった。また一旦景気が悪くなると不動産市場と株式市場は相互に連動して降下し、下降幅は単一の市場のものよりさらにどく、影響は至るところにおよび、人々は戦々恐々とし、社会はざわめいた。状況がこういった境地に至るまで、香港政府はただ市場の秩序を守るための処方を行うのみだった。例えば81年10月に香港政府は政策を改訂し、「土地購入の分割払い」を中止し、過熱気味の不動産市場を沈静化しようとした（馮邦彦、2001:133-139&160-163）。天水圍事件はこういった対策のもとでの具体的な案件である。次に詳しく説明するが、天水圍民間開発計画は70年代の不動産興隆の時期に構想され、棚上げされていたもので、後にふたたび政府主導の「公私合営」の新都心として改められた。それは政府が80年代初頭に不動産が大崩壊して「さらに重い薬を処方」した結果である。

天水圍「商機」は至るところにある

まず、どうしてデベロッパーは天水圍といったこんな辺鄙な土地を開発しようとしたのかということをはっきりと示さなければならない。これは徹頭徹尾地理的な問題で、香港の歴

史地理からによってのみ答えが出せる。歴史的要因から香港島、九龍市区内のすべての土地は公有地で、香港政府は土地の所有者となって民間に賃借し、地代をとるようになった。新界の土地はそのコントロールが非常に早い時期から香港政府によって掌握されており、地方のみが賃貸していたが、原住民の土地の権利を承認しないわけにはいかなかったし、土地を接収した際に、相応の賠償をしなければならなかった。歴史的に香港の初期の発展は市区内に集中しており、新界の発展は60年代以降やっと大規模に行われるようになった。政府は急速な発展のため「乙類換地権益書」(Letter B)を発行し、土地所有者が政府が開発した土地と交換できるようにした。そうして現金に代わって賠償し、財政負担を軽減した。この試みは新界の農地の所有権を保証し、農地を早期に買い上げれば買い上げるほどその利益は高くなった。当時の部分的な官制地の競売、入札には乙類換地権益書を持つ人だけが参加できたが、多くのデベロッパーが農地を購入する投機活動を手軽に行った(参照 Poon, 2005: 53-57)。新都心が新界の天地を覆い尽くすように開発されるにしたがって、開発できる土地が徐々に減少し、この境地にたどりついたデベロッパーは政府に土地を競売や入札へ流すよう強く要求した。そして往年の大商人鄧蓮如が77年の財政報告答案にこのような要求を提起し、政府も「民意」に答えるかたちで土地開発特別委員会を開き、年次報告を発表するようになった。そして先数年の毎年の開発計画と数量を発表するようになった(Bristow, 1987:116-118)。ここより政府が系統だってデベロッパーに土地を供給する道筋がひかれた。これと同時に一連のデベロッパーが新しい道を切り開き、自ら農地を買い上げ、土地備蓄を増やした(参照 Poon, 2005)。養魚場の点在する天水圍の土地がこの環境の下でデベロッパーに見初められ、開発のため備蓄されるようになった。

70年代初頭、天水圍は趙氏一家が「聯徳信託」連合として所有していた。70年代中ごろは不動産が好況であったが、72年末より上場後の長實会社が継続的に「土地はあるが金はない」上場企業と合併し、こういった会社の持つ土地を開発した。78年に会徳豊が「聯徳信託」を買収し、一年後にその傘下の38.5%の株式を華潤に売却し、その中から2億香港ドルの利潤を得た。華潤は何度も土地購入と競売に参加しており、最終的には「聯徳信託」と彼らのもつ土地を購入した。華潤はその後さらに大實地産、長實会社と合同で名為巍城發展公司(Midhtycity Ltd.)というデベロッパーを作った。後者は(51%の株は華潤が所持していた)79年10月より政府と36の部門で70の会議を行い、一年後には15年を期限とした3期工事を完成させ、人口53万5000の新都心計画の青写真を完成させた。天水圍新都心は公共および個人住宅、工業と商業の発展、運輸系統、コミュニティと公園施設を有している。この計画が天水圍という空間をデベロッパーは稼ぎどころ「天国」とみなしたため、ひとたび「巍城の天国の夢」という言い方が出てきた。

商業投機の失敗、政府による有償譲渡にも関わらず

この純粋な「商業ベース」に基づいた計画は政治的配慮がありながら、両者の間の矛盾

が計画の不協和として現れるようになった。『李嘉誠全集』では次のように評されている。「不動産発展の経験に欠け、香港のレジュー計画に精通していない華潤」（陳美華、辛磊、2005：135-136）は天水圍の新都心を発展させる際には、すべてを開発するか、さもなくば全く開発しなかった。イギリス香港政府は財政が比較的逼迫していた頃、民間が大型の土地開発プロジェクトに参画すること奨励していた。天水圍新都心開発計画はまさにこのやり方で開発することを目指しており、イギリス香港政府もさらに高いレベルからこの計画を考えるよう促していた。早くも79年のはじめ香港提督のマクレホースが北京を訪れたが、「香港の前途」については依然とはっきりしていないにも関わらずいくつかの兆しが見えてきており、香港の主権が中国に返還されるにあたって残されるのは管理権の類のかけひきであった。こうして如何なるものも談判の動向に影響するようになり、すべてが敬遠されるようになった。この前提のもとでイギリス香港政府は天水圍計画を延期することしかなかったが、同時に構想、計画の発展の青写真は描いていた。

82年になって「香港の前途」の問題がついに明らかになった。香港は1997年に中国政府に返還されることになった。栄光ある撤退とするため、香港の「民主化」をのぞいては財政の運用により経済の繁栄はほぼ維持されており、香港の前途に対する投資家の心象に影響はなかった。当時不動産価格は高騰しており、すでに市民の実際の購買能力からは遠くかけ離れていた。イギリス香港政府は81年に土地売却政策を改訂せざるを得ず、「土地購入の分割支払い」を取り消した。過熱した不動産市場を冷ますため、数ヶ月は金融の三級制を実行し、財務会社への借入れを強化し、不良債権を減らした。しかし泣き面に蜂で、81年以降世界経済が停滞し、香港経済も急速に鈍化するようになった。不動産市場は大幅な下落をまぬがれず、政府の財政収入も大幅に低下した（馮邦彦、2001：163）。この劣悪な環境に直面したイギリス香港政府は乱投資ができなくなり、民間が個別の開発計画でインフラやコミュニティのサービス施設を建設することが決められた。それが将来的な開発の青写真に影響するようになり、計画は海港西部を発展のポイントした「全港発展策略」に改編された。

「巍城の天国の夢」を実現するためには政府の大量の投資に依拠せざるを得なくなり、これが却ってイギリス香港政府の過渡期の計画に偏りをもたらし、また受け入れることができなくなった（The Hong Kong Government, 1982, Appendix :9）。しかし、イギリス香港政府が対峙したのは一般的な香港資本のデベロッパーではなく、「国家外貿部香港駐在貿易集団公司」という名の華潤で、その実績は一般とは異なっていた。（陳美華、辛磊、2005：135）。当時の不動産は低迷期に入っていたので、もし政府が巍城の計画を否決したならば、天水圍に投資するものが華潤の他にはすっかりなくなってしまおうのだが、高い利息が待ち受けている中、華潤は大きな財政危機に直面していた。中国資本の一つの失敗案件が投資家の香港の前途に対する心象に多かれ少なかれ影響を及ぼすので、失敗はイギリス香港政府の望むところではなかった。二つの困難に直面し、イギリス香港政府は唯一の選択をせまら

れた。82年に巍城の所有していた天水圍すべての土地448ヘクタールを買い上げ、22.6億香港ドルが支払われた。ある報道ではこの高い買い物はイギリス香港政府が支払ったことのない金額で、とりわけ買い上げられたのは中短期用の物件で（Bristow, 1989:220）、イギリス香港政府の苦心は並大抵ではないことが明らかになった。

その後の経過は努力を重ね、87年には天水圍新都心の建設プロジェクトが正式に開始された。以上からわかるように天水圍計画はひとつの不動産投機プロジェクトで、ちょうどこれは「清算」の終了にあたり、政治的配慮に基づいており、香港政府はこのプロジェクトを「購入」せずにはいられなかった（NYタイムズを参照）（Hollie, 1982）。

天水圍計画を採用した以上、香港政府は建設しないわけにはいかなかった。そこで財政支出を削減することができるならと、民間のデベロッパーの参入を認め、公私合営形式を採った。しかしそれはよい手立てであったわけではない。談判の結果香港政府が天水圍計画を提唱した巍城に38.5ヘクタールの土地を民間開発部分として開発させることになったが、地価として8億香港ドルが支払われた。それは土地価格としてはとても少ないものであった。陳美華、辛磊（2005:136&141）によると80年代半ばに巍城の内部に大きな変化が起こった。多くの株主が開発計画に関心を失っている中で、長實だけがその流れに逆行し、まず1.6億元で大實地産の25%の株を購入し、続けて華潤と協議の末7億5000万香港ドルの最低収益を保証するという条件で開発計画を進めた。また他のデベロッパーの開発コストも負担することに決まった。言い換えれば、長實が天水圍の民間開発部門をコントロールすることになり、現在の嘉湖山荘が作られた。この投資で長實は商業王国としての地位を強固にし、少々のことは問題にもならなくなった。

更に興味深いのが、嘉湖山荘の建設は天水圍新都心の建設のプロローグで、その後も香港政府は大量の金を使わざるをえず、土地の整地、道路、コミュニティ施設、高速道路など39億香港ドルあまりを使って嘉湖山荘のあるあたりを「天水圍南」として開発した。嘉湖山荘以外の「天水圍南」の土地には公共住宅が建設され、浪費は減らして、80年代半ば以降の人口増加を見越して13万5000人を収容できるよう建設された。天水圍新都心のその他の318ヘクタールの土地は「予備地」として、将来的に開発するためにおいてあった。すなわち現在の「天水圍北」である（話はさかのぼるが94年3月末に香港政府は再び不動産市場の不景気に対して市場救済措置を採った。天水圍200ヘクタールの土地をもとはインフラ建設のための政府の土地に公共住宅を建設した）（馮邦彦、2001:237）。これより明らかなのは、一つの「商業」投資が天水圍新都心の計画、そして天水圍の南と北とで格差のある開発体制を生み出し、最終的には数十万人が市中心から西北方向に移住することになった。

3. 天水圍の「計画の失敗」についての非政治的な論述⁵ *政治を政治化する (depoliticisation if politics)*

以上で歴史地理の観点より繭から糸をつむぐように天水圍開発の経緯を解析してきた。70年代以降、香港経済は以前と比べて更に複雑化している。また徐々に不動産が経済の動向を左右する構造ができあがった。株式市場を通じて資金が集められ、土地の買い上げや投資活動が繰り返され、資本の集中、及び集約が起こった。そうして我々が言うところの土地開発体制が出来上がった。このため市場の変動はより影響力を持つようになり、社会は更に変動し、状況は厳しくなった。状況はすぐには收拾できず、また個別の資本家では解決できず、政府の打ち出す手立てによってのみ難を逃れることができるようになった。天水圍の開発計画は「巍城の天国の夢」として、土地資本が選んだ一つの空間、都市の西北地域に位置している。当時は天は水に連なり、水は天に連なり、至るところには養魚場があった場所で大々的に土木工事をを行い、人口53万5000人の新都心が作った。農地を安くで購入し、住宅を高額で売る。そして巨額の利益を得る。この如意そろばんは不動産市場の不況に直面し、とうとう「天国の夢」はついでた。そしてイギリス香港政府は当時（80年代初め）経済の繁栄と社会の安定を保つため、また香港の前途を信じる投資家が投資するよう「清算」するため、開発計画により新都心を建設した。とてもあきらかなのは天水圍は一つの特定の時空の上に立てられたもので、いかなる認識もこの基本を共有している。

この基本よりはっきりわかるのが、天水圍問題の所在である。もとは一つの商売上の投資の失敗で、香港政府は土地開発体制の継続的な運営のため、また「カルタ反応」をおそれたため、一つの個別の空間を香港全域に拡散させ、公金を惜しまず投入し、このプロジェクトを挽回しようと努めた。この原動力及び運営過程が天水圍の空間に関連している。さらに確実に言えることとして、天水圍の空間はこの原動力と運営過程によってつくられた。つまり天水圍を論じるならまず土地開発体制の認識が必要である。政府は天水圍を分譲し、計画の技術的用語で飾り立てて、まずこのプロジェクトが否決された原因を説明し、マスタープランが過渡期にあるため——一つの空間の表象——それに偏りがあり、否決後に「買い上げ」形式ではなく、「購買」形式で投資者に「賠償」せざるをえなかった経緯を説明した。こういった天水圍を一つの関連した空間とみなさない行為は具体的には土地開発体制の運用を調査せず、その後さらに空き地について空間の表象的な面のみについて議論し、政治化したことに現れている。

現在流行している言葉より判断するなら明らかに天水圍は決して計画の問題ではない。たとえば言い換えるなら、「官と商の結託」「個人間での密談」である。現代的にはこうい

⁵ 70年代、都市計画の学界では当時の計画実践を政治化する行動 (de-politicisation) を批判している。この方面の論点では Scott and Rowe (1977)、Thomas (1979) などがある。本文は更に進んで空間性の論述に及び、具体的な都市の発展に対する政治の影響を考察し、この種の論点を更に深く探求している。

ったことは珍しくない。このようなできごとは単に過去 10 年でまず有数の港、続いて嘉享湾、現在は個人のデベロッパーの管理する公共用地（例えば地代広場など）で起こった。天水圍のこの事件によってもともと追求しなければならないのは、「初めて悪例を作り出した資本」（及び「幫助」したイギリス香港政府）で、現在住民は統治される対象となってしまう、実のところ「濡れ衣を着せられた」嫌いがある。天水圍の開発は非常に厳粛な政治的課題である。いったいこの投資の失敗をどう挽回できるのか？更に深いレベルの問いとして、政府はどのようなわけで経済、社会に関与するのか、誰のために関与するのか？どうして土地開発体制を支持するのか？どうして土地資本を重視して社会大衆を軽視するのか？とりわけ最下層には？後者については第二次世界大戦後にすでに最低限度のものを建設するため、都市は少なからず労力を尽くし、支出していた。功はなくても労はあったし、どうして彼らの生存権、居住権などは相応に重視されないのか？土地開発体制以外にも我々にとってほかの発展モデルはなかったのか？これらはすべて原則的な是と非で、大衆が討論すべき問題である。もちろん最終的な決定は各方面の権力が集まって決めるのであるが、天水圍の問題が不動産投機の失敗が引き起こしたものである以上、政府が挽回するためにとる行動は資本一辺倒で、一連の権力と空間が織り交ざって、いっしょくたになって決まっている。そこでその事情は「計画の失敗」としか言いようがなく、政治的な討論は不要で、もちろん徹頭徹尾政治的な行動も不要である⁶。

計画の政治化再び (depoliticisation of planning)

まず計画が政治的議論に代わって政治化するという大前提のもとで、天水圍の開発問題は再び「計画の失敗」という論調によって香港の都市計画の不合理性か、もしくは順序だっていない点に原因があるとされる。市民を天水圍に入居させた以上、公共施設やコミュニティサービスの充実をさらにすすめ合理化する必要がある。域内に空き地、緑地を有しているなら合理的にデザイン、改修し、経済活動を活発化させ、就業機会を設けるべきである。逆にコミュニティサービスが不足している以上、理にかなったやり方で公共住宅の建設を停止し、市民の入居を抑えなければならない。そして今ある落ち度を改善する必要がある。地域内にこんなに多くの低所得者層がいるならあのように緩慢な公共住宅申請者の入居を理にかなったやり方でやめて、貧困の集中を減らさなければならない。このようなことはどれも同じで、一言で言うなら、これら一連の問題が処理できないから計画の失敗というのだ！

多くの批判の中で、こういう言い方もある：香港の都市計画は理性化されすぎたため非人道的な局面に入っており、ただ都市の形があるだけで、生きた人間は居ない。ただ「官

⁶ 董（建華）が裏で糸を引いている以上、この種の政治化する行為は「はびこっている」。かつての公開手段が政治にとってかわり、近年（2008 年）の副局長および政治助理の任命でもめごとが起こっているため、公開化の気風は高まっている。

という字」があるだけで民主的な参画はなく、自然と人間の生活は完全に忘れ去れている⁷。こういう都市計画の現代性に基づいた批判もある⁸。天水圍では先進的な計画が新都心の住民の具体的な需要を軽視していると指摘されている。言い換えると非人道的計画の批判に対しては最後まで簡潔に一連の問題と片付けられてしまうのである。

上述の天水圍開発の史実からみて、これらの理解は実は皮相的であると言わざるを得ないのである。我々は天水圍がこの種の問題を抱えていることを指摘したいのではなく、もちろんこれらの問題が至極的を射ていて、罪悪には枚挙にいとまがないが、我々が主張したいのは天水圍の計画（空間の表象）が当初から理性的に解決できる技術的な問題ではなく、権力の構造によって決められていることなのである。この新都心の位置を選んだのはデベロッパーの市場の判断によるもので、政府はその後技術、理性を持って釈明した。おもしろいのがもとのデベロッパーが招いた新都心設計の計画顧問がのちに政府の委員会の重責に取り立てられたことだ。理由は本人がそのことに精通しているので費用と時間の節約になり、建設のスピードが増すとのことである。同じことは他にもあり、発展の青写真に関する二つの報告は「結局のところ」そっくりであった！⁹このような「擬似事件」は決して単純な技術の問題ではなく、権力が偏っている状況において、権力に対する技術が大きく一方向にふれ、合理的に飾られているからである¹⁰。もう一つの例としてデベロッパーはこれまで都心公園の建設管理を当時の域内市政局と数回にわたり交渉していた。これは決して一般市民の能力ではできないことである。最後に以前の新都心のやり方と異なり（沙田の第二世代の新都心のように計画と公共住宅が優先されるのではない）、天水圍では土地を売却し、まず個人住宅が建設され、占有地 38.5 ヘクタールに優先的に勢力の強い民間の開発プロジェクト—嘉湖山荘の立地が決定し、公共住宅建設計画は後回しであった¹¹。このように「天水圍南」は計画によって二つの相対する空間となった。あきらかなのは、この二つの空間は権力によって支配され、まず空間の表象がつくられ、それが建設中の空間の実践を左右し、最終的に住民の表象空間にも影響が及んだ。これらの過程を細かく単純な技術として考察をしたならば、理性的もしくは理性的でない表現が計画を政治的なものにしていたことがわかる。

この点については詳しく述べる必要があり、まずこの二つの空間について言及する。二つの空間とは明確に異なる絶対空間で、一つは交換価値を持った私人家屋で、もう一つはただの一般的な公共住宅である。前者は不動産市場で価値をもち、それがさらに（条件や）

⁷ 最も極端な例は胡恩威（2006）で述べられている：都市計画が香港を消滅させる。

⁸ この方面の論述には Calderia and Holston(2005)を参照

⁹ Shankland Cox Partnership, Binnie & Partners International and Peat Marwick Mitchell & Co. (1980)と Shankland Cox Partnership and Binnie & Partners (Hong Kong) (1983)を参照

¹⁰ これは先に提示した一種の権力方式である—うそについて詳しくは Flyvberg (1983) を参照

¹¹ 嘉湖山荘楽湖は1991年に販売が始まり、1992年初めにプロジェクトの一つとされた：また天水圍の最初の公共住宅群の天耀村は1992年に落成し、1993年にプロジェクトに組み入れられた

価値を高めている。58棟の28階から40階の個人住宅群はすでに「顕要な地位」に位置しており、香港島からビクトリア湾を囲んで、(後期に建設された)大きな天水圍公園、公共施設、集会所、商店、ホテルがすべて揃っており、また厳重な保安門がつくられて、居住者の身と財産の安全が確保されている。後者は都合よく配置された公共住宅で低下層用である。嘉湖山莊一帯の土地が既に売りに出されている以上、公共住宅は「天水圍南」の残りの土地に分散するしかなく、それぞれが指定の範囲内だけに存在する。天水圍は内海の湿地の一部分で、地下に空洞があり、地上には養魚場、農地が広がっていた。新都心の建設のため整地工事はもとの社会生態を破壊しており、「人家の人気もない」絶対的空間で、人、事、物との関連に欠けた空間である。加えて沙田の第二世代の新都心設計モデルのように(参照:鄧永成等、2007)特定の機能によって厳格に空間がわけられ、住宅用地には公共住宅が建てられ、公共施設は指定された場所に設置され、互いに明白に分けられているわけではない。またその他各種活動が排除、制限され、新しい住民生活の要求に応じた絶対的な空間というのは天水圍では全く形成されがたい。

この2つの絶対空間は共に置かれ、それが強烈な相対空間を作り出している。個人家屋の住人は私人集会所の施設及びサービスを楽しむことができ、また乗り物に乗って域外で消費することができる(または仕事に出かけることができる)。公共住宅に入居した住民の多くはかつて建設業が発展したことで成長した低収入の労働者階級で、そのうちの大多数は最近の一連の経済調整の中で淘汰されてしまった。彼らは空間の実践を待望しており、苦々しく域内の公共施設が完成することが待ち望んでいる。持ち家住民との空間の実践の格差、あるいは双方を比べてみると、天水圍の公共住宅住民が表象する空間の明確な無力感や手立てのなさは先の新都心住民が想像できない、あるいは受け入れられないものである。先の世界の新都心の多くはまず公共住宅を建設し、それが一定程度達した後にやっと個人住宅が「上座」へ移り、新都心の中で土地の分譲が行われていた。「開拓牛」としての公共住宅の住民が黙々と耕すことが、却って個人住宅地域に居住している住民の生活と強烈な対比を映し出しており、そ表象空間の無力感や手立てのなさは非常に強烈である。加えてその年の失業者数は90年代に比べてそれほど多くなかったため、その群衆心理はバランスを失うほどではなかった。逆に天水圍の「開拓牛」が自身のかつての市の中心や大陸での生活と比較したら、その無力感、手立てのなさは更に強いものとなるだろう¹²。

こういった無力感や手立てのなさは一連の住民が絶対、そして相対空間における空間の実践、およびその表象にある土地開発体制内の権力の不均衡を反映している(Tang: 2008参照)。この体制は市民のうち家を持つものと持たざるものの2つに大別してしまう。その

¹² 私は住民の中に「良い」表象空間がないと言っているわけではない——「天水圍は一つの樂園」といった見方が住民の中に「良い」空間実践がないと言っているのであって、——とても多くの住民が積極的に生活している。こういった論法は陳惜姿(2006)や基督教香港信義会天水圍青少年綜合服務中心、香港大学社会科学学院(2007)などを参照。

ため計画の主な対象は民間の開発プロジェクト及び少数の持ち家者で、強大な交換価値を生み出す空間を作り出すやり方で行われる。もし計画設計が長年待たされていた一群のための公共住宅か十分に使用価値のある空間に対して行われてたのであれば、ここで触れる程のことではない。こういった土地の所有権が基礎となった計画システムにおいては公共住宅の住人は持ち家の所有者になれず、またデベロッパーのように土地の割当人（入居者が持ち主であるが、基本不動産業者が割当人で）ともなれず、また旧式の「都市計画条件」で定められた計画決定においては「隅の方に追いやられている」（05年6月に改修されたのちの新条例では大衆の意見を一部盛り込んだといっても本質は変わっておらず、ただ発言権が増しただけで、根本的には何も補われていない）ことは最も明白で、計画設計ではどうやって公共住宅住民の使用する空間に対して優先的な地位を与えているのだろうか？¹³

逆に公共住宅住民の要求を過分に聞くのも「非理性的」でまた社会（それはデベロッパー中心となるが）が認めない！権力の不均衡は理性的にまた順序をかんがみれば解決するというものではない。理由は簡単で計画の理性及び順序を強調すれば理知的な考え方やロジックとの整合性、部分部分に応じた手法で難題を解決することになり、それは理性的でない票集めという政治決定の方式にとって代わられるようになるからだ（計画システムを改善するための市民の参加ルートを決めるにしてもだ）¹⁴。このロジックにより「理性的」というのも一連の計画にのっとって行うことであり、（planning standards and guidelines）その多くは公共施設を増やすか対外的な交通手段を増やすことになり、それがわずかに公共住宅住民の絶対空間（公共施設を増やす）あるいは相対空間（対外交通手段を増やす）に対して「技術の上で」実行され、社会に対して変化したと見せかけるのだ！

しかし、こういった思考パターンは問題を簡潔化させ、またこの種の思考回路は空間的表象が絶対空間と相対空間を強調するだけである。関連した空間の存在及び重要性を感知できない。それを続けていても概念及び言語よりその期限、要因、特色や結果を解釈できない。もし関連した空間の存在を理解できないなら、絶対、相対空間との関係をうまく処理できない。土地所有権を基礎とした、またその交換価値が意味を持つ空間の形成を打破できないのであれば、住民の生活需要を満足させるように空間の建設、つまりコミュニティ、集会場で過ごす時間を増やせるか、また対外的な交通を改善して外に出られるようにしなければならない。しかし貧困な公共住宅住民は依然として適当な仕事を見つけられず、十分な収入ももらえないので、彼らの暮らしを十分に満たすことはできない。彼らの無力感、手立てのなさはどうのように解決もしくはなくすることができるのだろうか？天水圍の現

¹³ 近年の市区の重複建設には他に更に矛盾を抱えた例がある。当時政府が言っていた市区の重複建設は「人を本位とした」もので、民間はそれが却ってコミュニティのネットワークを放棄し、香港を消滅させていると言っている。もし本文と同様の観点から分析したらこの矛盾に対して一つの初歩的な理解ができるだろう。

¹⁴ 現在民間で流行している「人民計画」のことである。この種の見解は土地開発体制の権力が不均衡であるという認識に欠けている。

況は権力と空間が織り交ざって一緒くたになってできている。もしこれらの問題を解決したいなら、政治的な議論をしてその空間構造の背後にある権力の不均衡について言及すればそれでよい。計画を理性的に順序だてて停止するには徹頭徹尾政治的行動を取り去るからである。

総じて言えば、「計画の失敗」論の内容が乏しいのはまず計画が政治議論に関わって展開され、政治問題化され、計画を理性的に、順序だてて行おうという議論が更に政治化するきっかけとなり、資本に傾斜した強固な土地開発体制ができあがり、それが続けられているからである。

4. 結論

本論文は歴史地理の観点より着手しており、繭から糸をつむぐように天水圍開発の疑念を解き明かす。そして「計画の失敗」という論調の貧困さを論証する。そのため特定の時間、空間において発生した土地開発体制の中で、天水圍で土地投機として行われた不動産プロジェクトを分析する。不動産市場が低迷した際、この体制を崩壊に導く可能性を減らそうとイギリス香港政府は公金を惜しげもなく投入し、状況を挽回するため天水圍に新都心を作ることを計画した。新都心ではまず個人の住宅家屋が建設され、後に公共住宅地域が建設された。ここから天水圍は交換価値の生じる空間を強調し、使用価値を持った（使用することに価値のある）空間を軽視していることがわかる。公共住宅の住民は就業機会を得ること、公共施設の使用、外部への交通のいずれもが不便であるという意味で、絶対空間と相対空間が欠如しており、設備が比較的揃っている個人住宅の住民もまた地域の元からの住民と連携が取れず、かつての市街地（もしくは大陸）での生活と継続性がない。こうして普遍的に発生するような強烈な無力感や手立てのなさにより数々の悲劇が引き起こされた。

天水圍の開発問題はこのようにしてできあがったが、世論が問題を簡潔化して「計画の失敗」と論じるなら、天水圍の開発問題は土地の開発体制の中から切り離して、計画に関する議論は理性的に順序だてて停止する。空間において作り出される交換価値と使用価値の矛盾をやわらげ、視線を個人から家庭に移し、多様な人民統治のやり方を考えていかなければならない。香港政府もこの種のもっともらしい論述や分析を楽観視し、資本に傾斜した土地開発体制を強固にし、それを継続的に運営している。しかし、上述の分析に依拠し、更に視野を広げ、空間という観点から見ると、天水圍開発問題は「計画の失敗」という政治的でない問題から再び政治問題として議論し、土地開発体制の表面から探求を進めなければならない。このようにしてやっとな天水圍の住民に顔向けができるだろう！

参考文献

- 陳美華、辛磊 (2005) 『李嘉誠全集』、中国戲劇出版社、三河市。
- 馮邦彥 (2001) 『香港不動產業百年』、三聯書店、香港。
- 福柯 (趙曉力訳)：統治術
(<http://www.pkucn.com/viewthread.php?tid=140406&extra=page%3D1>)。
- 胡恩威 (2006) 『香港風格 2：消滅香港』。進念。二十面體、香港。
- 基督教香港信義會天水圍青少年綜合服務中心、香港大學社會科學學院 (2007) 『關鍵時刻：天水圍 18 位青少年的成長印記』 基督教香港信義會社會服務、香港。
- 強世功 (2003) 『法律與治理——國家轉型中的法律』、中國政法大學出版社、北京。
- 邵家臻 (2008) 『天水·違』、藍天圖書、香港。
- 鄧永成、王潔萍、文沛兒 (2008) 「城市的地理考察：以『空間故事』為師」、鄧永成 (編) 『灣仔社區地圖集：灣仔未來發展藍圖計畫』、雅集出版社、香港 (付印中)。
- 鄧永成、陳劍青、王潔萍、郭仲元、文沛兒 (2007) 「回溯『沙田價值』——超越中環價值的歷史地理觀」 Occasional Paper 76, The Centre for China Urban and Regional Studies, Hong Kong Baptist University, Hong Kong. (鄧永成、陳劍青、王潔萍、郭仲元、文沛兒 (2008) 「中環(セントラル)の価値の歴史地理観を超えて—「沙田(シャティン)の価値」を回顧する—」 URP GCOE Working Paper, No.1, 大阪市立大学都市研究プラザ)
- 文匯報 (2007) 「周永新：解決天水圍問題 當局須增加資源」、『文匯報』2007 年 11 月 25 日 (<http://paper.wenweipo.com/2007/11/25/HK0711250011.htm>)。
- 壹週刊 (2001) 「非情天水圍」『壹週刊』2001 年 11 月 29 日
(<http://www.wisenews.net/wisnewscgi/enterprise/doc.pip?bi=200111291120063%3BS>)。
- Allen, J. (2003) *Lost Geographies of Power*. Blackwell, Oxford.
- Bristow, R. (1989) *Hong Kong's New Towns: A Selected Review*. Oxford University Press, Hong Kong.
- Bristow, R. (1987) *Land-use Planning in Hong Kong: History, Policies and Procedures*. Oxford University Press, Hong Kong.
- Caldeira, T. and J. Holston (2005) State and urban space in Brazil: from modernist planning to democratic intervention. In A. Ong and S.J. Collier (eds), *Global 15 Assemblies: Technologies, Politics and Ethics as Anthropological Problems*. Blackwell, Oxford, 393-416.
- Flyvberg, B. (2005) Design by deception: the politics of megaproject approval. *Harvard Design Magazine* 22, 50-9.
- Flyvberg, B. (1998) *Rationality and Power: Democracy in Practice*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Harvey, D. (2006) *Spaces of Global Capitalism: Towards a Theory of Uneven Development*. Verso, London.

- Hollie, P.G. (1982) Hong Kong helps a neighbor. *New York Times* 3 August 1982.
- The Hong Kong Government (1982) Special Committee on Land Supply: Report to His Excellency the Governor. The Government Printer, Hong Kong.
- Lemke, T. (2002) Foucault, governmentality, and critique. *Rethinking Marxism* 14, 49-64.
- Massey, D. (2003) *For Space*. Sage, London.
- Merrifield, A. (2006) *Henri Lefebvre: A Critical Introduction*. Routledge, London.
- Poon, A. (2005) *Land and the Ruling Class in Hong Kong*. A.C. Poon, Richmond, B.C.
- Scott, A.J. and S.T. Roweis (1977) Urban planning theory in practice: a reappraisal. *Environment and Planning A* 9, 1097-1119.
- Shankland Cox Partnership and Binnie & Partners (Hong Kong) (1983) *Tin Shui Wai Development*. New Territories Development Branch.
- Shankland Cox Partnership, Binnie & Partners International and Peat Marwick Mitchell & Co. (1980) *Tin Shui Wai Urban Development Studies: Executive Report*.
- Tang, W-S. (2008) Hong Kong under Chinese sovereignty: social development and a land (re)development regime. *Eurasian Geography and Economics* 49, 341-61.
- Tang, W-S. (1997) The Foucauldian concept of governmentality and spatial practices: an introductory note. *Occasional Paper 107*, Department of Geography, The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong.
- Thomas, M. (1979) The procedural theory of A Faludi. *Planning Outlook* 22, 72-77.



